



卓 話



「職人仕事の完璧主義者 イチローと『次郎』」 料理評論家 山本 益博氏

私は東京生まれの下町育ちで、小さい頃から下町の職人が家の扉を開けっ放しで仕事をしているのを見ることが好きな子供でした。長じて今でも職人仕事に大変興味があります。職人仕事は昨日も今日も明日も繰り返しの仕事をするものです。師匠や大将、先輩の仕事を見て、果たしてそのような仕事ができるようになるのかと思いつつ、同じ仕事を繰り返しつつ、毎日考え、無駄を省き、自分の工夫を加えて、世の中で言われている名人となり、いつかはその境地に達するのです。現在、日本人の中で職人仕事をする完璧主義者の最高峰はマリナーズのイチローと“すきやばし次郎”という寿司屋で寿司を握っている小野次郎さんの二人ではないか、ということでこの二人を取りあげ、職人仕事の完璧主義とはどんなものか、ということをかいつまんでお話ししたいと思います。



昨日もおとといもスケジュールを入れずにイチローの試合を見ていました。今日も11時からやっているはずで。彼は2001年に渡米しました。1年目から前半戦の活躍ぶりが注目されてオールスターゲームに出場することになり、それをきっかけにNHKが彼の特番を作りました。その番組の最後、どこかのホテルのインタビューでイチローは席を立ち際に、カメラに向かって「やっている事は全て意味がありますから見ていてください。記録だけではないですから」というようなことを言いました。私はこのコメントを聞いた瞬間、同じ時代の空気を吸っている中で最高の職人かもしれない、追いかけてみようと思いつつ、イチローの一挙手一投足を見るようになったのです。するとイチローはすごいことをしていることを発見しました。マリナーズの本拠地であるシアトルまで行って、自分の肉眼でイチローを研究すると、昨日も今日も明日も同じ事をしていることに気がついたのです。例えばイチローはネクスト・バッターズ・サークルという準備するところから、バッターボックスに入るまで全て左から始めます。マリナーズの球場で試合する時は一塁側のベンチ、自分のいつも座っているところから

飛び出して、左足で白線を踏むのに1回は19歩から21歩で行きます。2回から9回までは23歩から27歩です。何年間も見ていますが変わりません。スリーアウトになって戻ってくると彼は1番バッターですので、自分の定位置に座り、帽子を脱いでヘルメットをかぶり、左の手袋をつけてから右の手袋をはめます。これにプロテクター、サポーターをちょっとゆるめてつけ、ベンチを左から上がっていく。彼はバットをボックスに入れず、自分の定位置の右のところに立てかけておくのですが、それを持ったまま、ネクスト・バッターズサークルにいくとマスコットバットという素振り用の重いバットを持ち、そこで準備を始めます。そこで必ず3回、左まわし右まわしと左右と振ります。最初の年はそこでぺちちゃんと座っていたのですが、今はそれをやらず、マスコットバットを置き、自分の黒いバットを持って2度素振りをします。アナウンスがかかると、イチローはアンツーカーからグリーン芝生のところへ向かい、必ず13歩でぴたりと止まります。そこでワンスイングをし、バットを立てかけて背中ストレッチをします。左が伸びるため、右の足首を回してから左の足首を回す。このときだけ右が先です。そこから左、右と出るとちょうどバッターボックスのラインにつきます。そこで自分のバットを膝に置き、お相撲さんが勝ち名乗りを受けた時の手順と同じように、センター左、右とやります。これを今までは非常にはっきりやっていた。今年は少し動きが小さいようですがちゃんとやっています。なぜそこまで同じ動作にこだわるのか、理由が実はあります。いくつかの理由があるのですが、「イチローに学ぶ」という個人のロングインタビューをした時にこれらのことを聞くことのできた時、彼にはフィールドでの「勝利の10ヶ条」があることを知りました。①やっていることにすべて意味がある。②何より準備が大切。準備が大切ということを出したのは、野球選手でイチローが初めてです。松井がホームランを打った一昨日のゲームで「ちゃんと準備していたから」と言っていました。去年位から“準備”という言葉は松井は使っていますが、これはイチローの影響ではないでしょうか。私は松井は天才バッターだと思っていますが、完璧主義者ではないと思っています。ホームランを打つと、彼はその後のコメントで完璧に打てた、とすぐ言ってしまいます。完璧主義者は完璧や理想といった言葉を使いません。私はこの6年間、イチローのコメントの中から完璧や理想という言葉は1回も聞いていません。完璧はありえないものであるけれど、完璧に向かって準備を整えるのが完璧主義者です。③毎日の仕

事の再点検を怠らない。料理人だと最後に包丁を研ぐ時、1日の仕事をもう1回振り返るといいますが、イチローもグラブの埃をぬぐい、油を塗る間、今日の試合を全て振り返るので、我が家に帰る時は野球のことは全て忘れると言っていました。④道具を使いこなす。職人というのは道具がないといけません。頭で考えることを手で表現するのが職人仕事です。その手で使う道具を知らないと使いこなせません。⑤すべては小さな積み重ねから。年間262本という最多安打を打ったのも一本のヒットを打ったから、と言っていました。だからどんなヒットでもうれしくてしょうがないと言っていました。⑥ことあるごとに基本を見直す。⑦他人の評価より自分の成果。他人の打率より自分の方がちょっといいから優れているとは思わない。自分の目標をクリアできたかどうかの方がよほど大事であるということです。⑧失敗から多くのことを学ぶ。⑨目標を高くかけ結果を出す。野球はやはり記録が大事と言っていました。⑩完璧を目指して最善を尽くす。完璧はないが、その時の最善を尽くすということです。

この中のいくつかを説明したいと思います。バットですがヒッティングで出る時もバットの先が地に着くまでバットのグリップをはなしません。道具を大切にしていることのあらわれです。こんな丁寧な置いていく選手は誰もいません。バッターボックスに立って、ヒットを打ち1塁に出ると、右ひじのサポータを1塁のベンチコーチに返し、そのあと手袋をしたまま右の人差し指でヘルメットの右穴に指をいれる仕草をします。この記憶のある人は相当なイチローウォッチャーだと思います。これはヒットで出塁の時は必ずやりますが、フォアボールで1塁に出る時はやりません。何故このような動作をするのかと聞いたところ、暫く考えてから「リセット」ではないだろうかと言いました。僕はどんなヒットでもうれしくてしょうがない、強く外野にはじき返すヒットはもちろんうれしいが、ピッチャーの前に転がり、間一髪1塁セーフであっても笑い出しなくなるほどうれしい。一つ一つの積み重ねがないと262本には到達しない。表情を出してしまっただけは相手に自分の気持ちを読まれてしまう。ピッチャーだけが敵ではない、キャッチャーも敵だし指示を出している監督だって敵だ、周りの全てが敵なので自分の表情を読ませず、次の局面ですぐに対処しなくてはならないのだから何かのアクション、自分が忘れてしまうほど無意識で出来るものでやっているのではないか、という答えでした。これを聞いたのは2005年のことですが、2006年からは2度やっています。昨日もやっていました。つまり何か聞けばその理由が出てくる。彼の行動は全て意味があってやっているということです。私は球場でイチローを見る時、ベンチの中のイチローが気になってしょうがないのです。ですから3塁側から野球そっちのけでイチローばかり見えています。ベンチに戻る時、イチローだけはバット・ケースから自分のバットを取り出して点検してから自分の座席に持って戻ります。私は今打ったヒットのヒッティングポイントを点検しているのではないかと思い、そう聞いたところ、いったん人の手に渡ったバットを自分の道具として取り戻す

為にチェックしている、という答えが返ってきました。つまりその点検はバット・ボーイから自分の道具として取り戻すためのことだったのです。

また、見ていると彼は自分の座席にずっといません。自分の打順に関係がないとすぐにロッカーに降りていきます。毎イニング、アンダーウェアを取り替えるそうです。メジャーの選手はみんなそうなのかと聞いたところ、自分だけである。次のイニングで予期せずに長い時間守っていた場合、体が冷えるのを防ぐ為に念の為にする。何かあった時の言い訳を最小限に食い止める為の準備だと言っていました。

昨日、一昨日と、盗塁を失敗していましたが、失敗から多くを学ぶ彼はそこから何かを学ぶと思います。2004年のあるゲームで、2回の表にノーアウトでランナーもいない打席で、ふらふらと上がったライトフライをあのイチローがぼろりと落としました。試合後のコメントはヒットをその試合で多く打ったにも関わらず、エラーのコメントに集中しました。太陽がまぶしくてエラーしたのかという質問に「いや、違う自分の野球人生で一番恥ずかしいプレイのひとつだった。野球の基本に立ち戻れということではないでしょうか」というコメントを残しました。シーズン・オフになってからその時になぜ「野球の基本に立ち戻れということ」というコメントを言ったのかと聞きました。するとすぐに思い出し、「自分のところに飛んでくるボールはいつも美しくとりたいと思う」と答えました。野球選手が言う言葉でしょうか。イチローは確かにいつも正面ではボールを取りません。自分ではそれが美しい取り方と思っているのでしょうか、必ず左に向き合って取ります。イチローはスライディング、ダイビングを絶対にしません。無理に取るのはファイン・プレイではない、楽々と取って見せていても実は難しかったというのが本当の「ファイン・プレイ」ではないかということでした。昨年のWBCの試合で、最後にセンター前ヒットを打ちましたが、その時の打順が回ってきた時、いつもとしないことをしました。唇をなめる、こんなしぐさをするイチローは見たことがなく、よほどの緊張しているのかと思いました。2、3日後のコメントでは、日本中が騒いでいる中、野球人生で覚悟を決めなくてはいけない打席だと思った、サインが敬遠でないことに気づき、そこから気持ちが変わった、と話していました。そこでセンター前ヒットを打って1塁を回って2塁に駆け込んでいく途中、どうやったら1塁に美しくたってられるかということを考えていたとも言っていました。2塁上でNHKがアップで彼を撮った時に、あらぬ方向を見てヘルメットの穴に指を突っ込む例のしぐさを4回やっていましたね。イチローの鉄仮面の無表情の下で、やっていることには全て意味があります。ヘルメットしぐさを聞くような意表のつく質問をすると彼は色々と言ってくれます。彼はバットも置くのも2004年までは平行に置いていましたが、ある年から40度くらいに置いています。なぜ置き方が変わったのか。ある時気がついたのですが、ここから90度のラインを引くとピッチャーズ・マウンドに向かっています。向こうとこっちを引き離している結界を作っているのではないかと思いまし

た。芸能の世界で能役者から芸者まで共通した小道具は扇子です。挨拶する前に自分の前に置いてこちらは玄人、あちらは素人という線引きをする、そういつつもりではないのですかと聞いたら、結界という言葉は初めて聞いたが意識はそうだという答えでした。こちらがそれを聞いて喜んでいたら、これ知ってる？ミズノというボールを一回たりとも斜めに置いていない、いつも上に置いていると言います。それを聞いて、見ていなかったと・・・今度はそれを見てとのことでした。イチローから見過ぎと言われていますが、また今年イチローを丁寧に見ようと思っています。いつもと違うことをどこでやったか、何のためにそれをしたか、それが職人仕事を見極めることと思います。

私がイチローと初めて会った時に、食事に誘いました。天婦羅屋か寿司屋に誘ったところ、天婦羅は良くわからないから、ぜひ寿司屋にということで行ったのが“すきやばし次郎”です。私はそこで寿司を握る小野次郎さんの仕事が日本の職人仕事の最高峰だと思っています。もう85歳になっていますが、いまだに矍鑠としています。住まいは中野新橋で、朝はよほど天候が悪くない限り新宿まで歩き、丸の内線に乗って銀座に行きます。11時ごろ店に出て、お昼の仕事が終わり、みんなが休んでいる間、雨の日には銀座の地下道、天気の良い日には銀座の町を散歩してから、夜の仕事をこなして8時半には店を閉めます。これをずっと欠かしていません。40歳の時から70歳になると手にしわ、しみが出てお寿司を人前に出す時、お客さんに見られてしまうので握りにくくなると、一年中手袋をはめることを欠かさず、今でも手を見ると私よりきれいです。つまりイチローと同じように準備を怠らない、70歳の準備を40歳の時からしていたのです。

次郎さんはやっていることに対し、常に改良を考えていた人です。お酒を出さずに、鮎だけで勝負する唯一の寿司屋として日本で一番、ということは世界で一番の寿司屋を極めたいと思って50年やってきた、今、一番すばらしい鮎が握れていると豪語します。そしてそのお寿司をめぐって、日本中からお任せコース20貫を食べに人が集まってきているのです。

コースは最初、白身から出てきます。白身、いか、今ならいなだ、そしてマグロのづけ、中トロ、大トロ、コハダ・・・そして、蛤、鰻、車えびと続きます。ずっと下の酢飯は人肌でいながら、ひかりもの、白身のネタは冷たい温度、マグロは常温よりちょっと冷たく。穴子は常

温。蛸、車えびは茹でて一番暖かくと寿司に4種類の温度があるのです。三ツ星をとってからフランスなどの国外からお客さんがいらっしやいますが、鮎に温度があるということ始めて知ったと感心して帰ります。

このコースが出来上がったのが、8年前です。30~40年前までは寿司屋は必ず看板であるマグロを先に出していました。今では白身から出る店が多くなりましたが、この出し方はすきやばし次郎が始めたことです。味の薄いものから濃いものへいったほう味がわかるだろう、マグロから白身に移ったのではあの淡白な美味しさが伝わらない、ということで20貫のコースをつくり、私にこういうお任せでどうでしょうかと勧めるので試してみました。食べ終わって私は感心したあまり「大変申し訳ないのですが、貸し切りでこの握りを10人で頂くことは出来ないか」とお願いし、7時半に客を集めて1時間のコースを引き受けてくれたのです。7時半少し前に私達は一列に並び、そのコースを頂くことになりました。テーブルの上に何も無いところから始まり、何も無くなるところで終わる。本当に10人ぴたりと終わった時、時計を見るとなんと8時35分でした。「5分延びちゃったね」と、大変悔しそうな顔をしていました。さて、その寿司を食べた人達が感動してふれまわったので、是非そのお寿司を体験したいという人達が出てきて2、3週間後に再び同じコースをお願いしました。7時半にまた10人で1時間です。その時は8時半ぴたりに終わりました。終わってから私のほうを見てにやりとし、「今日、途中で手を抜いたのわかる？」と聞いてきました。握りやすいネタは皆に気付かれなないように、1、2回程握る回数を減らす。これを3つやれば5分縮まるだろうと思ってやってみたとのことでした。

これが完璧主義者です。自分がやろうと思っていた事を必ずやってのける。いつでもお寿司のことだけを24時間考えている。私は「至福のすし―「すきやばし次郎」の職人芸術―」という本でこのコースのことを書きました。芸術なんて職人に使うなど生意気と言われてしまうかもしれませんが、まさにイチローと次郎さんのやっていることは芸術です。今でももっと寿司が美味くなるはずだと日々努力している。料理人に人間国宝がいますが、第1号にふさわしいのは小野次郎さんだと思います。もっとすきやばし次郎のお話をしたいところですが、ちょうど時間となりましたのでここまでにしたいと思います。